

地域医療担う人材育成とキャリア支援 県と連携、大学の責任果たす

医学部附属病院特命副院長（地域連携・病院機能評価担当）
医学部附属病院 地域医療研究・教育センター長
大学院医学系研究科 内科学講座 腎臓・リウマチ内科学分野 教授

廣村 桂樹 [ひろむら けいじゅ]



群馬大学医学部附属病院は使命として、将来の群馬県の医療を担う医療人の人材育成・キャリア支援と地域連携に取り組んでいる。課題の一つは地域医療の将来を担う若手医師が少ないこと。これにどう立ち向かうのか。

地域連携を担当するのは医学部附属病院特命副院長の廣村桂樹教授である。

❖ 県と連携、地域枠学生と卒業生の キャリア支援

— 地域医療と本学の医学部附属病院の関わりについてお聞きます。先生がセンター長である病院内の地域医療研究・教育センターが地域医療との接点の一つですね。その役割は？

地域医療研究・教育センターは以下の7つの部門からなり、将来の群馬県の医療を担う医療人の人材育成・キャリア支援と地域連携に取り組んでいます。また、群馬県の地域医療全般を協議する目的で平成30年に設置された「ぐんま地域医療会議」（事務局：群馬県）に地域医療に関する必要な情報を提供する役割も担っています。

7部門のうち男女協働キャリア支援部門および地域医療支援部門の部門責任者は羽鳥麗子先生です。地域医療支援部門は、県が実施主体である群馬県地域医療支援センターから受託している事業が中心で、県と連携しながら進めています。同部門の取り組みの柱は、地域枠の学生と卒業生のキャリアサポートです。

■地域医療研究・教育センターの7つの部門

○臨床研修部門（臨床研修センター）

○スキルラボ部門

○男女協働キャリア支援部門

○地域医療支援部門：群馬県地域医療支援センター

○看護職キャリア支援部門

○看護師の特定行為研修部門：看護師の特定行為研修センター

○管理運営部門

— 地域枠学生が必要とされる背景を説明してください。

群馬県は医師が不足しています。各都道府県の人口10万人当たり医師数を、相対的に多いグループ（全体の33.3%）、少ないグループ（同）および残りの平均的なグループの3つに分けると、本県は少ないグループに入っています。地域の偏在も顕著で、前橋医療圏は多いのですが、特に太田・館林、安中、吾妻医療圏は少ないです。医師の診療科の偏在もあり、産婦人科、小児科、救急科、外科、総合診療科が特に不足しています。

医療施設従事医師数を年齢構成（5歳きざみ）で見ると、本県は全国平均と比べ20～30代の若手医師数が少なく、医師の県内定着や地域偏在の解消が課題です（図）。

— 大学の医学部に、県が地域枠を確保するようになったのはいつからですか。

平成21年度に群馬大学に5人の群馬県地域枠を設けたのが最初です。令和6年度まで地域枠は本学だけで、この間、累計323名が入学しました。令和7年度から県は、県外私立大学にも枠を確保しました。同8年度は本学25名（編入学5名含む）、4つの私大に計6名、あわせて31名と拡大しています。

❖ 一般内科医や総合診療医を求める声

— 本学が総合的な診療能力を持つ医師を養成する拠点づくりに乗り出しました。「ぐんま総合診療医センター」を設置し、群馬県、県内の医療機関と連携し、医師を目指す学生の大学入学前から卒業後まで一貫した指導体制を築く、とのこと。

ぐんま地域医療会議の会合では、医師が不足している地域や診療科が限られる地域から、幅広い疾患に対応できる一般内科医や総合診療医を求める声が強く寄せられています。「ぐんま総合診療医センター」の活動は、時機に合ったもので、病院内・学内の関係部署が連携して、計画を進め、地域医療に対する本学の責任を果たしていきたいと考えます。

❖ 膠原病に伴う腎障害を一体的に診療

— 先生は腎臓・リウマチ内科の診療科長で大学院医学系研究科腎臓・リウマチ学教授ですが、腎臓・リウマチ内科の診療と特徴はなんですか。

当科では、慢性腎炎、ネフローゼ症候群などの腎疾患から、関節リウマチ、全身性エリテマトーデスなどのリウマチ・膠原病まで幅広く診療しています。腎臓とリウマチ・膠原病の双方を専門とする医師が多く、特に膠原病に伴う腎障害を一体的に診療できることが当科の大きな特徴です。

— 腎臓の状態がその人の寿命を決める、という話を聞きました。

腎臓が悪くなると、心血管病が増えます。「慢性腎臓病（CKD）」という名称が2002年に米国の財団によって提唱され、日本でも2007年ごろからこの呼称が広く使われるようになりました。本県では、平成24年に群馬県慢性腎臓病対策推進協議会（事務局：県）が発足して、私が会長を務めています。毎年、公開講座を開催するなど、啓発活動にも力を入れています。

❖ ループス腎炎を研究

— 先生の臨床・研究で今、取り組んでいることは？

腎疾患とリウマチ性疾患の双方に深く関わるループス腎炎を長年研究してきました。腎病理所見や尿中バイオマーカー、長期的な治療成績を解析し、病型や重症度に応じた治療の最適化に取り組んでいます。さらに、指定難病データベースを用いて全国の患者背景や治療実態を検討するとともに、日本腎生検レジストリーから臨床所見や組織所見と腎予後の関連を解析しています。研究成果を、一人ひとりに適した治療選択に生かすことを目指しています。

